

中国語における因果関係を表す複文に関する研究  
～説明因果文、反事実仮定文及び疑念を表す推論文を中心に～

氏名 王 芸嫻

中国では、20世紀から説明因果複文、推論因果複文及び仮定因果複文に関する研究が盛んになり、数多くの成果が蓄積されてきた。また、前提・焦点など情報構造の諸概念が導入されてから、中国語における焦点に関する研究も増えている。だが、複文に関しては焦点構造に関する研究はほとんど行われていないのが現状である。焦点構造の確定は、文の強調される部分を明示することに大きな役割を担うため、本研究は、上述の3種類の広義的な因果複文の前提、情動的焦点及び対比的焦点を明らかにした上で、各複文の使用目的、使用条件、焦点移動の条件及びそれにより生じる文の多義性を分析し、各複文の特徴を明らかにすることを目的とする。

用例は、主に「日中対訳コーパス」、「語料庫在線」、「CCL 語料庫」、「BCC 語料庫」から収集した。本研究で取り上げる複文は、説明因果複文として“因为”の導く文、推論因果複文として“既然”の導く文、仮定文として“如果”の導く文である。この3つの構文のうち、原因節を焦点化した“因为”文、反事実“如果”文及び疑念を表す“既然”文の構文特徴及び意味表現を取り上げ、それぞれの前提、情動的焦点及び対比的焦点を明らかにした。次に、対比的焦点の移動から生じる文の多義性、及び多義性から生まれる諸現象について分析を行った。なお、各複文の交替性から、焦点による分類も検証した。前提及び焦点が一致するのに交替性が異なる文に対し、異なる言外の意味を持つためであると説明した。

本稿は全5章から構成される。

第1章では、本研究の目的、研究対象、背景、用語及びデータの収集方法について述べた。複文の分類方法の再検討により、本研究の研究対象である3種の複文の分類について述べ、比較・対照の可能性を確認した。

第2章から第4章にかけ、研究対象とする3種類の複文の焦点構造及び焦点移動条件に関する問題点について分析を行った。

第2章では、“因为”文の原因節を焦点化する条件及び焦点移動による意味の変化について論じた。副詞“才”により原因節を焦点化することは、すでに指摘されているが、その焦点は対比的焦点であることを明らかにした。次に、副詞“才”がない一般“因为”文は、“因为……才”文と、①交替可能②交替不可③交替すると意味が大きく変化するという3通りがあることを述べた。その観察により、対比的焦点の有無は原因節焦点化可否を決定し、話し手が $p \rightarrow q$ ( $p$ が $q$ を成立させる)を支持することが原因節焦点化の必要条件であるとの結論を得た。さらに、この対比的焦点である $p$ は話し手が自ら提示する内容であれば、焦点マーカー“是”を用い、 $p$ は聞き手から提示する内容であれば、焦点マーカー“正”を用いるのが一般的であると述べた。

第3章では、反事実“如果”文の前提、焦点及び焦点移動による多義性を考察した。反事実“如果”文を“因为……才”文との交替可能かにより分類して考察した結果、交替可能のi類は仮定節内容の否定命題である $\neg p$ の排他性を証明する文、交替不可のii類は仮定節内容である $p$ が偽であることを証明する文、交替すれば意味の変化が大きいiii類は結果節内容である $q$ の実現難易度を強調する文というそ

れぞれの意味的機能を明らかにした。さらに、i類とiii類の言外の意味が異なることを指摘し、それが多義性が生じる原因であると述べた。

第4章では、原因節内容であるpに対する疑念または否定の態度を表す「疑念を表す“既然”文」を取り上げ、焦点及び焦点移動による多義性について考察した。まず、疑念を表す“既然”文の定義を明らかにした。次に、ライテスト及び“否則”テストで疑念を表す“既然”文の前提、情動的焦点及び対比的焦点を明確にした。その結果、疑念を表す“既然”文の前提と情動的焦点は一般“既然”文とは真逆であり、また、帰結節を対比的焦点とするのが特徴であるという結論を得た。この点において、ii類の反事実“如果”文と似ているが、反事実“如果”文より客観的であるという特徴を持っていることを明らかにした。最後に、疑念を表す“因为”文と疑念を表す“既然”文とは話し手が疑念または否定を表したい部分が異なるという区別を明らかにした。

終章の第5章では、本研究のまとめと今後の課題について述べた。

本研究では、先行研究で積極的に行われていなかった複文の焦点に関する研究を行い、因果類複文の情報構造上の特徴を明らかにした。特に、対比的焦点の有無と移動による意味の変化に関するアルゴリズムを確立した。これによって、因果類複文における発話意図及びその発話意図を実現するための語用論的条件を明らかにし、自然言語処理ツールの開発や第二言語教育分野へ貢献することが期待できる。